

ある子ども



堀越清

……相談所の遊戯室に入ると、年のころ六才ぐらいの男の子が部屋のまん中に立っている。みればおもちゃの電車を手にしているのだが、ふつうの子どもなら、その電車をレールに走らすとか、床を走らせるというのをやるのに、この子は車輪をつかんでさかさにして車体を左右に振っている。カチャカチャカチャと鳴る音にじっと耳をかたむけている……オヤオヤこの子は妙な遊び方をするな、と思っていると、彼は自動車や貨車などでも矢張り同じことをやり始めた。出る音は電車と又ちがうがそれらの音にもじっと耳をすましているように見える。走らせるといふことはついぞやらなかった。

……よくみると、車の音に耳をよせているのに、その子の眼はあらぬ方を見つめていて、それも何か現実そこにある天井のしみとか壁の色などを見ているわけでもない。もっと遠くの何か眼には見

えないものを追っているかのようなのである。

その子の顔つきはいえ、目鼻立ちのどつた可愛い顔をしている。おそらく街なかをこの子が歩いている時に行きあえば、そんな奇妙なことをする子どもとも気づかずこちらが通りすぎてしまわうだろう。いわばまともな顔付きをしている。

だがその表情はほとんど動きを示さない。彼の目を見ると、まばたきはするが何か目の形をしたガラス玉が動いているといった硬い感じで、生きてる眼という実感が余りしてこない。

私はその部屋に入って行った時、彼は私の方を見たかのように思ったが、よく見ればそのガラス玉の眼がこちらに動くには動いても、何か私という人間が入ってきたという事実を全然みとめていないかの如く、その表情にいささかのゆらぎもみられなかった。逆に

私の今迄持っている「生きていく子ども」という体験からでる枠組みとはおよそかけはなれた印象のする子どもである。わずかに、玩具の音にじっと耳をよせているその姿に「人間臭さ」を感じるといった程度。別ない方をすれば、男の子の姿をした動くお人形、といった表現がびったりする位である。……

幼稚園などに入園するたいていの子どもですと、ものごころがついて三、四才をすぎている子どもなら、自分が独り遊びをしている部屋に、他のそれも見知らぬ大人が入っていけば、その子なりに何か感情のどよめき——はにかみ、おそれ、よろこび、不安、かなしみなど——を生ずるはずでしょうし、そこから何か緊張というものがいろいろの形でその子を支配するものだと思います。よく現代っ子の典型だといわれている子どもには、「誰がこようと我関せず、僕は自分のしたいことをしているだけだ」と他人をまるで眼中におかないような子どももありますが、それでも表情は動きますし、眼も生きていて、とも角その子なりの人間くささを感じさせられるのですが、例の子どもはそれともちがうのです。もう少しその子どもの動きを追ってみましょう。

……車の音をきくのを止めた彼は、片隅の机上にあるチャイムを叩き始める。しばらくの間は、四個の音をかわるがわる叩いて鳴ら

していたが、今度は強くならしながらそのチャイムを両手に持ち、しきりと首を左右にふる。そのふり方がいかにも機械的で私にはそれが何を意味するのかさっぱり見当がつかない。そこで彼がそれをやめて立ち去った時、私もその真似をして音をだしながらチャイムを手にして首をふってみますと、何と音がワンワンとウィウラートしながらきこえてくる。なるほどこうやって音に変化をもたせてきこうとしたのか、とそこでやっと彼の仕事の意味が分りかけたような気がすると同時に何か感心もしてしまった。でも当のご本人は私がそんなことを考えていることにはおかまいなしに砂場で何かやっている……黙ってみていると、先ほどふりまわしていた電車や貨車などを砂上に縦にして突っ立て始める。あらかた立ててしまふと、玩具のスコップや熊手なども、柄を下にして矢張り突っ立てている。それも尽きると、今度は細長い積木を立て出した。直方体状のものもあれば端が斜のものも含めて突っ立てる。とも角、さまざまの形の細長いものが砂の上に入りみだれて直立している状況であるが、何とも形容のつけようもない不可思議な場面である。

(これを読まれた方はいちどご自分で砂場にやってみてごらんになると、ある程度その場面の様子がお分りになると思います。)

何かその場面をみつめていると、その砂場が砂漠に見えてくる。そうしてそこに立っている細長いいろいろな物が古代のお墓のよう

にも見えてくるし、原始人のトーテムポール状のおまじないの塔に

もすから見える。私には元米売種家の傾向があるので、ついでに空想を走らせると、それらが古代巨石文化の名残りというか、あのイースター島などにみられる遺跡を思い浮かべもして。しかも自分の作業のあとを表情ひとつかえないで見つめている彼のガラスの目をもった顔、それは石の面のように動かない顔であるが、その作品ともども見くらべていると、これらの「建造物」が何かそれぞれ生命をもつて生き始めるかの如くにも見えてくる。アニミズムの世界とはこういうものかなとも考えられる位、何かうす気味のわるい光景である。大体からして、電車や貨車、自動車などが砂上に突きでている状況それ自体何か無気味なものであるし、それに加えて本来あるべき状態の積木やスコップなどがすべて突っ立っている状況は、ふつうの場面では到底想像もつかないものである。

何だかこの子の心の一端というか、その子の住んでいる世界をはしなくも覗いたような実感が私はしてきた。非現実の現実という言葉を以前に何かの本で見たことがあるが、まさにこの状況にぴたりしている。写真にとろうと思ったが、彼はそれを知ってかどうか、とも角すぐその作品をバラバラに倒してあとかたもなくしてしまった。……

少しくどく書きましたが、もう少し彼の動きを追ってみましょ

う。

……砂場から立ち上った彼は円卓上の絵本を手にした。しきりと口の中で何かいっている。よくきくと、いろいろな童謡を部分的にこちゃませにして唄っているような感じである。そうかと思うとスーダラ節がでたり、テレビのコマーシャルがでたり、何か訳の分らぬおまじないのような、ことばにならない音声をだしたり、いっこう捉えどころがない。これらを繰り返して咬いている。私には、何のために彼がそれらを口にするのか見当がつかない。ただどうも「きげんのよい」状態らしく、顔は「笑顔の形」になっている。ハハア、安定感の状態の時の彼特有の「儀式」(その人特有の表現様式)だな、ということが分ってきた。この儀式はその後も続いている。さて絵本をバラバラめくりだした彼は、ある頁を覗く。いかにもその頁を見ているのだといわんばかりに、その頁のすみからすみまで眼を走らすのだが、何と眼と一緒に顔も上下左右に動かすので、何だかその頁の前で顔を動かす運動をやっているみたいにもとれる。つまり本の内容には余り関係がないようにも見えるので、私が「ああ、モモタローだね」と水をむけると「モモタロ、モモタロ」と口早にそれをくりかえすだけで、そのモモタローのところを見ている訳でもない。と思うと今度は、バラバラと繰り返しめくっている。しだいにその速

度を早める。私がおきこむと、どうも彼はバラバラとやる一枚一枚からくる風を顔にそよがせてたのしんでいるとしか見えない。やがてはもっと顔を近づけてバラバラと顔の皮膚をなでさせてそれをいつまでもくりかえしている。どうも本の扱い方がふつうの子どもと全くちがう。……

みなさんはこうした奇妙な仕草をする子どもにどこかで出会われたことがおありでしょうか。実は、この子には「自閉症」という病名がついています。そして、大学病院の神経科に通いながら、それと平行して、相談所で私とつきあっているのですが、もう一年以上になります。自閉症の子どもと自閉的な子どもとを混同される方がありますが全然ちがうといえます。自閉的な子どもとは、いわば「引込み思考」とか「内気」な子どももの極端な場合ですが、そういう子どもでも、何か「人間くささ」をただよわせているはずですよ。つまりその子なりに他の人となじめない「不器用さ」をかかえて本人も苦しんでいるし、何か心理的なものからくる感じですよ。

ところが自閉症の子どもですと、別に他の人となじまなくともそれで苦しむとか悩むということは余り見受けられません。むしろその子に何とかなじもうとして苦しむのは私たちの方です。何かはつきりしたことはいえませんが、神経組織の組立てがちがうらしく、

ふつうの子とは全然別の離れた世界で暮しているような子どもなのです。

ところで今頃は幼稚園など新しい子どもが入ってくる時期ですが、当事者にとっては、いろいろな子どもにふれられることと思いますが、こうした自閉症児に直面されて、頭を痛められるむきもありませんが、でもどこかの園ではきっと出会われることでしょう。なにより決め手は、子どもの眼の動きと、表情の動き、それから人間どうしのやりとりの通じ具合にあると思います。

入園時には、園になじまない子どもが必ず見受けられますが、大抵は、親との心理的離乳が不十分だったり、知能の発達が遅れてそのため社会性も育たなかったりなどの理由がみつかるものです。多くは、時とともにしだいになじむのが常ですが、自閉症児の場合には、そういう訳には行きません。中には、ファイトのある方が、こういう子どもを何とか園の生活になじませようと思って苦労されても、いつこうにききめがない結果となってしまうでしょう。少なくとも、集団の中にその子を入れてみても、ほとんど意味がないようです。では一体どうすればよいのでしょうか。昨年、いくつかの学会で、この自閉症児の問題がかなりクローズアップされてきましたが、

この子たちをどうやって現実社会に適応させるか、ということはこのところ決め手となる方法が余り見つかりません。わずかに、心理療法を回数的に多くして、そこで、治療者がナマの自分をだして子どもに働きかけ、何とか子どもの感情に訴えていくやり方でそれとまだ試行錯誤の段階で行なわれている程度です。しかもそのやり方自体かなり根気と人手の要ることなので、これから考えると、自閉症児の場合には、幼稚園など集団保育をやる場所では不向きといつて差支えないでしょう。

私ご紹介した子どもは極端な例かと思いますが、しかし私たちのまわりのどこかにそうした子どもがいることは事実です。いずれ機会がありましたら、実例をお見せしたいものと思いますし、どういうつきあい方を遊戯室でやっているか、その実情もご紹介したいものと思っています。この他に、心理的なものから生ずる「かん黙児」という問題もありますが、この紹介は別の機会にゆずります。こうした極端な例からみますと、多くの場合、たとえ園の集団保育になじまないとしても、大ていは、家庭でのその子どもの体験が狭いことからくる、いわばケチな不適応児の場合は、関係者の努力と時とが解決をもたらすでしょうし、手がまわりかねる時は、地元の相談所などで遊戯治療をうけさせることによって解決できるのではないで

しょうか。少し楽観的なものいい方をしましたが、入園時期にあたり、何かのご参考にと思って書きました。ご質問頂ければ有難いと思っております。

(東大分院小児科)

日本保育学会第19回大会

会期 昭和41年5月21(土)・22(日)日

会場 福岡県北九州市・戸畑文化ホール

内容 (イ)研究発表

(ロ)シンポジウム

(ハ)その他

共催 西南女学院短期大学

西南学院大学短期大学部

連絡先 福岡県北九州市小倉区中井

西南女学院短期大学内

日本保育学会第19回大会準備委員会

電小倉50二六三一(代表)